

クルリンと ほしぞらさんぽ 7月号



ほしぞらさんぽ、やってみましたか？

梅雨明けが待ち遠しいですね。梅雨が明ければ、星空はもう夏空のモード。夏の大三角とか、はくちょう座とか、天の川とか、さそり座とか、早く見たいですね。

七夕さまと暦こよみのちがい

7月7日は七夕ですね。でもその日って梅雨の真っ最中ですよ。どうして梅雨空で天の川を見ることになったのでしょうか。変だと思いませんか？それは150年前、江戸から明治に変わった時に「暦こよみ（カレンダー）」が切り変えられたから起きた不思議なのです。

みなさんが使っている今の暦は太陽の動きを元にして作られています。江戸時代までの暦は月の動きを元にして作られていました。毎月の1日目は必ず月が見えない日（新月）から始まるようにカレンダーを決めていたので、毎月15日は必ず満月でした。このような暦を旧暦きゅうれきとか太陰暦たいいんれきとか言います。

そして七夕は旧暦の7月7日と決まっていたのですが、その日は今の暦だと8月になり、2022年は8月4日にあたります。

8月ならもう梅雨は明けていますし、天の川がほぼ南の空から天頂に向けて見やすい位置にかかっていますから、七夕まつりにはぴったりです（次ページの星空の図を見てみましょう）。天の川が描かれているでしょう？

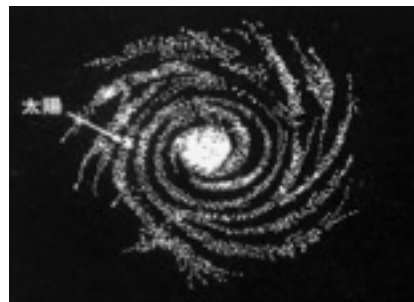
天の川

七夕と言えば天の川、だから天の川って7月7日の夜だけしか見えないんだよね…、なんて思っていますか？

夏の天の川は7月から8月中ずっと見えますし、9月に入っても見えています。ただし見える空の方角が南東から南西へと変わっていきます。天の川は1年中見えていて、冬だって夜空が十分に暗い場所に行けば天の川はいつでも見えます。

ではなぜ七夕まつりは8月（旧暦の7月7日）になったのでしょうか。それは、天の川が一番はっきり見えるのが8月だからなのです。

天の川は銀河と呼ばれる星の大きな大きな集団です。1千億個とも2千億個とも言われる星が集まっている大きな円盤状で、その星の大集団のはじつこに太陽系が位置しています。地球から見ると星の集団（銀河）の中心方向は星の数が多く、ぎっしりつまって見えますし、銀河の外側を向いてみると星が少ししか見えないので、天の川には濃い部分やうっすらと見える部分があるわけです。そして夏の夜は星が密集して濃い部分を向いているので天の川としてははっきりと見えるのです。



七夕の星

肉眼で星を見ていた昔の人が選んだのですから、七夕のお話の星は明るく目立つはずですね。全天には1等星が21個ありますが、夏の大三角の3つの星も1等星です。こと座のベガ、わし座のアルタイル、はくちょう座のデネブ、この3星ですね。では七夕話の織り姫と彦星はどれでしょう。

織り姫はこと座のベガ、彦星はわし座のアルタイルです。2星の間に天の川があるはずですね。次のページの星の図を見て確かめましょう。

夏の大三角

3星の中で一番明るいのは織り姫星おりひめぼしと呼ばれていること座のベガで、ベガは0等星、地球からの距離25光年、表面温度は約9500度（太陽は約6000度）、青白い光を放っています。質量、半径とも太陽の約3倍の星です。

次はひこ星と呼ばれていたわし座のアルタイル。この星は質量は太陽の1.7倍、半径が1.8倍、

地球からの距離は17光年、およそ0.8等級ですから立派な1等星です。

そして3つの中で暗く見えるのがはくちょう座のデネブ。じつは直径が太陽の200倍もある巨大な星で、非常に明るい星なのですが、距離が2600光年と遠いために暗く見えていて、1.25等の星になっています。

さそり座の星たち

南東の低い空に夏の星座でもっとも知られているさそり座の頭にならぶ3つの星とさそり座の1等星アンタレスが見えています。夜遅くなるとさそり座の全体が地平から上がってきてその左側

(東側)に天の川が見えてきます。さそり座はかなり大きな星座です。星座早見盤を参考にしながら自分で探してみましょう。

7月にも流星群が

7月30日ごろにみずがめ座の流星群があります。月明かりがなくて流れ星が見られそうです。

ISS 7月14日 19時43分ごろに国際宇宙ステーションが、南の空を西から東へと動いていくのが見えるかもしれません。

